

特集 凝視の先に——佐多稲子の文学——

文化冊子

草茫々通信

12号

2018・6・29

特集 凝視の先に

——佐多稲子の文学——

書肆草茫々

〒849-0922
佐賀県佐賀市
高木瀬東5-12-6
☎ 0952-31-1608

〈序〉佐多稲子 その文学と道のり 4

長谷川啓、小田切秀雄（転載）・戦時下の佐多稲子・略年譜

主な作品と案内 —— 32編を紹介（紹介者16名） 32

代表的問題作品を読む 50

『素足の娘』『くれない』『私の東京地図』『歯車』『灰色の午後』
『溪流』『時に佇つ』『樹影』『夏の栞』『童話』

佐多稲子の佐賀・長崎 164



昭和16年当時の佐多稲子／撮影・福田勝治
（『凧として立つ 佐多稲子文学アルバム』より）

凝視の先に——佐多稲子の文学——

(序) 佐多稲子 その文学と道のり

『時に佇つ』に到る道 今、なぜ佐多稲子か	長谷川 啓	5
◆戦時下の佐多稲子		16
佐多稲子と宮本百合子、壺井栄 (転載)	小田切秀雄	18
佐多稲子略年譜		21

主な作品ご案内 作品名と()内は紹介者 32~48

『キャラメル工場から』	(王 晶)	『レストラン洛陽』	(富崎喜代美)
『牡丹のある家』	(矢澤美佐紀)	『くれない』	(八田千恵子)
『樹々新緑』	(平原奈央子)	『素足の娘』	(矢澤美佐紀)
『私の東京地図』	(五十嵐福子)	『或る女の戸籍』	(矢澤美佐紀)
『私の長崎地図』	(五十嵐福子)	『女作者』	(長谷川 啓)
『虚偽』	(長谷川 啓)	『泡沫の記録』	(長谷川 啓)
『白と紫』	(後藤ひろ子)	『三等車』	(王 晶)
『機械のなかの青春』	(野田敦子)	『夜の記憶』	(小林裕子)
『体の中を風が吹く』	(小林美恵子)	『歯車』	(五十嵐福子)
『灰色の午後』	(小林美恵子)	『泥人形』	(伊原美好)
『水』	(王 晶)	『女の宿』	(宮脇永子)
『溪流』	(小林裕子)	『塑像』	(小林裕子)
『風になじんだ歌』	(伊原美好)	『重き流れに』	(伊原美好)
『哀れ』	(島内真知子)	『樹影』	(谷口絹枝)
『時に佇つ』	(長谷川 啓)	『夏の葉』	(八田千恵子)
『年譜の行間』	(八田千恵子)	『月の宴』	(野田敦子)

◆佐多稲子原作の映画 49

代表的問題作品を読む

「素足の娘」から〈家族〉への眼差し	伊原美好	51
佐多稲子「くれない」の現代性		
——大衆とのへだたり・子供の語られ方	矢澤美佐紀	60

「くれない」——私を別扱する	森 明香	68
書き抜き、生き抜く——「くれない」の時代と生活	平原奈央子	72
百合子に語る「私の東京地図」		
——〈私は東京地図〉という矜持	小林美恵子	80
佐多稲子「歯車」に見る「政治と文学」		
ハウスキーパーという再生産労働	鳥木圭太	86
『灰色の午後』——〈夫婦の共犯〉意識の語られ方	谷口絹枝	94
◆田村俊子の不可思議な魅力	島内真知子	102
◆田村俊子の『山道』	八田千恵子	104
『溪流』——「わが家」はなぜ失われたか	小林裕子	106
〈実感〉の深度 佐多稲子『溪流』(転載)	花田俊典	114
記憶と感情——『時に佇つ』を読む	勝又 浩	120
「この人たち」の孤独——『樹影』概観	村上陽子	127
◆『樹影』文学碑	八田千恵子	134
無彩の光——画家・池野清のこと——		
『色のない画』『樹影』を画家の眼で読む	野中耕介	136
中野重治を追悼する——佐多稲子『夏の葉』の青春	竹内栄美子	146
『童話』が物語る世界——その幻想美	五十嵐福子	156

佐多稲子の佐賀・長崎

佐賀・長崎時代	五十嵐福子	165
佐多稲子の佐賀弁——『情愛』『生きた兵器』に見る	八田千恵子	180

佐多稲子研究会 その歩みと研究

研究会50年の歩み	五十嵐福子	190
佐多稲子研究の紹介	谷口絹枝	195
会誌「くれない」総もくじ		200~205

◆佐多稲子作品集(筑摩書房)全15巻の構成		206
各巻「月報」もくじ		207
◆佐多稲子全集(講談社)全18巻もくじ		212
各巻「月報」もくじ		209

草茫々通信 総もくじ 223~219
あとがき 224

記憶と感情 『時に佇つ』を讀む

年齢というものは、子供のころは別として、成人になってからは概して厄介なものだ。とくに加齢などと計られるようになるというものは一つもないように思われる。しかし、あまりナマな問題は措いて、少し離れて眺めれば、それはそれでなかなか面白いもの、不思議なものであることも否定できない。

佐多稲子が『時に佇つ』を書いたのは昭和五〇年、作中にもあるように七一歳のときだった。連作短編として「文藝」に一年間連載されたが、その途中、なかの「その十一」が独立して翌年の第三回川端康成文学賞を受賞するなど話題になった。そんなこともあつて私も単行本刊行とともに読んで、何か言いがたい深いものに触れたという思いが残つたのを今も覚えている。しかし今度読み直しながら、当時の自分が果たしてどれだけ読めていたのか怪しいもの

うことでもある。過ぎたことは案外に近い。老年のこの感覚は、今日についての麻痺でもない。今日は今日としてありつつ、いわば老年は、わが生涯の振り返しにつつまれる。それは回顧ではなくて老年の現在でもある。(「その四」)

全くそうなのだ。何と身につまされることは、そして事実ではないか。過去は決して過ぎ去つたことではない。それは常に現在なのだ。それゆえ、過去をより多く持つ老年は、いきおい背負っているたぐさんの過去・時間を掻き分け整理しながら前に進ま

勝又浩

文芸評論家。法政大学名誉教授。著書に『私小説千年史』(※和辻哲郎文化賞)、『中島敦の遍歴』(※やまなし文学賞)などのほか、近著に『鐘の鳴る丘』世代とアメリカ(白水社)。神奈川県横浜市在住。

だな、という思いも禁じえなかった。というのは、今、佐多稲子がこの小説を書いた年齢をとうに超え、彼女の次の名作『夏の葉』を書いた年齢にも重なる自分から見ると、この小説には年齢を重ねた者にか見えないう深いところ、重いところがたくさんあつて、まず、その事実には圧倒されるからだ。たとえばこんなところ。

三十数年前がふいに今日に結びついてくるといふことが一方にあるのも、私の年齢になって出会うなければならない。そしてそうなつてみて初めて過去が現在だという現実にもぶつかるのだ。まさに「老年は、わが生涯の振り返しにつつまれる。それは回顧ではなくて現在である」ということだ。まったく人生の名言ではないかと、いま日本の平均寿命年齢を迎えた私はしみじみとこのことばの真実に打たれ圧倒される。

そして思うに、作者自身もこのころ、人生のこうした感触的な真実、時が経つのではなく、自分が時のなかに佇っているのだという発見を持ったのではないだろうか。河出文庫版に添えた「著者ノート」『時に佇つ』によせた私のおもいには、「題名をおもいついたとき、私の気持が弾んだ」と書いている。時間と「佇つ」ということばとが結びついたとき、改めて人生の一つの姿が見え、この小説の主題が決まったのであろう。

ちなみに言うと、こんな側面もある。佐多稲子はこの『時に佇つ』の連載の始まった同月、「新潮」にも短編小説を発表しているが、そのタイトルは「時間」であつた。作者が共通するモチーフのなかで模索するように書いているらしい事実をうかがわせる



『時に佇つ』(河出書房新社・一九七〇)の函と表紙

が、そこにはこんな一節がある。——「若いときは、過ぎてきた期間もまだわずかなのに、その過ぎてきた時が、もう遠くに、去ってしまったもののようにおもえていたものだ」、「過去に対する当時のこの絶縁感覚は、自分では意識しないほどの自然なものだった」ところが、

若いときの五年間がそのように緻密なときだったと回想するにしろ、いまの同じ年月を、希薄とばかりおもうのでもない。ただ昔と今の、時間の感じ方に質的な相違があるとすれば、それはどういふことになるのだろうかとおもう。若い日に、五年前は忘れていたほど遠ざかった時だったのに、老いの今日の五年前は、昨日のようにさえ感じられたりする。(「時間」)

『時間』は『時に佇つ』と同様、何人かの人との再会とその顛末展開を描いているが、それを繋いでいるのが「時間」の意識であつて、ご覧のように、ここでは主人公はまだ「時間」のなかに「佇」っていない。むろん、これはこれで、いわば情理整つて

「私には、柿村がその人といっしょになつた当初から、その人に対して何の感情もないのである」(「その十一」)などは格別特色を言うほどの例ではないかもしれない。念のため状況を補足しておけば、別れた夫柿村の再婚相手の女性についての気持を言つたところだが、この「感情」をことさら分解してみれば、嫉妬も羨望も、安堵も軽侮もない、つまり関心が無いということになるか。それを「感情」の語で言うところが、強いて言えば特色である。この章の初めの方には、会合など大勢いるところで柿村と同席するのは「何でもない」が、そう思うと同時に「一方で浮かんだ感情は、二人だけでは絶対に厭というものであつた」と書かれたところもある。行動の規範が理屈ではなくて「感情」なのだということであろう。

あるいはこんな例——

「やっぱりそうでしたか。いいかたでしたのに……」
と私の語尾は感情を引いたものになる。(「その二」)

訪ねてきた放送局員が、仕事が終わつたあと、自

いてその限りでは何の不足もないが、あえて言えば、ごく常識的な時間感覚であつて、これ自体に感動するというでもない。小説としての面白さはもつぱら伝えられた話題の力によるということになる。

この『時間』と『時に佇つ』の「その一」と、同月に発表されている二編は、どちらが先に書かれたものか、厳密なことは分からない。しかし、作者の意識のなかでは、「時間」のような経験と思索と、そして創作とを重ねたなかで、「時に佇つ」という発見に至つた、そんな道筋が想像される。そうした過程を経て、先の『時に佇つ』(「その四」の名言、「老年は、わが生涯の照り返しにつつまれる。それは回顧ではなくて老年の現在である」)も生まれてきたのであつたらう。

*

今回は「作品を読む」という課題があつたせいかな。普段とは違つたところに目が行つたようで、その一つが「感情」という語だつた。『時に佇つ』にはこのことばが独特なニュアンスをもつて度々使われている。いくつかを挙げてみよう。

分の母親は「吉本恒子」だと告げた。吉本恒子はかつて左翼運動を共にした女性で、噂では早くに亡くなつたと聞いていた。それを確かめると、そのとおりであつた、という場面である。

ともに活動をしたときから既に五十年近い年月が経つているし、ましてその消息を存在すら知らなかつた、しかし仕事の繋がりのできた息子から聞くという思いがけない展開。「語尾は感情を引いた」という、その「感情」にはおよそこんな思いが込められている。付け足しておけば、このあと「私」は、この青年は癌のために急死したと、彼の父親、つまり吉本恒子の夫から聞くことになる。呼び起された過去はもう一つの現在となつて「私」を揺さぶるわけである。

「その四」には、「戦地にいる兵隊と直かに接した経験は、自分の行為の意味を感情で溶かすものだった」といふ言い方がある。これもまず他では見ない特異な表現だが、しかしここは逆に、佐多文学の読者にはこれで充分通ずるし、その方が思いを膨らませるところであるかもしれない。ここに詳しくは立入らないが、佐多稲子が戦後苦しむことになる、

戦争責任の問題、小説『虚偽』や『泡沫の記録』などに描かれた苛烈な状況、そうした運命を招くことになった原因が、ここでは「感情で溶かす」と言われているのだ。戦場で命を懸けて精いっぱい任務を果たしている兵隊たち、そういう彼らに人間的な感情を通わせたために、戦争全体にノーと言うべき姿勢を見失った、というのである。

言われてみると、これはとてつもなく難しく重い問題だ。前線の兵士たちの生きざまに感動し、心を通わせたことが思想的な間違いを犯す原因になったのなら、では、それ以前、工場で黙々と耐えて働く工員たち、女工たちと立ち交じり、心情を共有し、心を通わせたことは何だったのか。労働者たちと心を通わせたことのないプロレタリア作家など信じられないが、労働者とはよくて、兵隊とではいけない。その「感情」とは何なのか。

この「その四」では、最前線で兵隊たちと一晚を過ごした翌早曉、見送られながら陣を去る「私」が、自分のその行動を、「帰ってゆくことを突きつける冷酷さに、私は感情を收拾しかねた」と言っている。そして彼らの姿も見えなくなり、別れの声だけが届

のである。何でそんなことになったのか、その経緯を書いたのがこの一編である。

昭和一〇年、非合法運動のなかで「私」が六〇日間留置されたが、そのとき戸塚署の「特高室」で度々一緒になったのが、この男だった。その特高室は取り調べや差し入れの弁当を食べるときも使う部屋であるが、そこでは呼び出された留置者がお茶をいれて、まず刑事たちに配り、その上で自分も飲むのが慣例だった。しかし「私」は密かな抵抗としてそこでお茶くみを拒否していた。ところが、しばしば一緒になる彼がそのときは代ってお茶をくれたのだ。

私は彼にお茶くみをしてもらって、胸の中で言
い訳をした。

——あなたは男だから。私は女なので、刑事た
ちにお茶がくめないのです——

常識をさかさまにしたこの言い分は、私の実感
なのであった。反抗的であると同時にまた、感覚
の上に走る嫌悪でさえあった。

その後、彼は他へ移され、「私」は釈放されてそ

いたとき、「私は、その呼び声を聞いたとたん、もう制止がきかず、ほとぼる声で泣いた」と書いている。このとき、兵隊たちの別れの声が、「帰ってゆく私たちへでなく、その人自身の故郷への呼びかけとして聞えたのだ」とも。ここで「私」は兵隊たちの、いわば魂の叫びを聞いたのだ。こういう「私」を、こういう「生涯の照り返しにつつまれている」佐多稲子という作家を、私はずっと大切に思っている。もつと言えば、兵隊たち、労働者たちと、心から「感情」を共にしたことなど無くて、そのおかげで思想的には間違わなかったような立派な人たちよりも、である。

*

「その六」にはこんなエピソードがある。敗戦間もないころ、招かれて伊豆のある町で行われた座談会に行った。そのとき、翌日廻る予定の町で座談会の準備をしていた一人の男が打ち合わせのために訪ねてきた。会った「私」は俄然、一〇年前の記憶が蘇って、思わず「あのときは、ごめんなさい。あなただけにお茶をくんでもらって」と詫言、という

れきりになったが、この一〇年後の再会でとっさに出た「あのときは、ごめんなさい」の挨拶には、こんな背景があったわけだ。

今でもまだその空気は残るが、男子厨房に入るべからず式の役割差別があつて、家庭でも職場でもお茶を入れるのは女の仕事と決まっていた。身分階級男女の平等思想を持つ左翼運動はそうした封建遺制との戦いも含んでいたから、「私」も無言で抵抗していたのだが、しかし、集団のなかに女がいなければそのなかで一番立場の弱い者がそれに代わることになって、彼女の抵抗はおのずから彼にその仕事を押し付けることになった。

こんなエピソードを読んで私がすぐ思い出したのは『くれない』の一場面だった。

広助が誰かと討論している時には、私は黙ってお茶を汲んでいるわね。黙ってお茶を汲まざるを得ないのよ。何んだか亭主と一緒に言ううでおかしいのよ。一緒の時にはどうしても、外から見れば女房は女だという気があるでしょうからね。

別のところでは広助がお茶を入れて明子に差し出して、お茶くみに通つては平等観念が通つていゝらしい。しかし客人などのあつたときはそれを押し通せない、という明子の「感情」、また「感覚」のことを言つてゐる。

ここでは、滝井岸子が最近、プロレタリア作家であれば当然女の立場にも理解があるから、夫婦の間でも男女差別の問題は克服されると、そんな主意の随筆を書いた、それについての明子の疑問というかたちで言われている。この会話の少し前には、家について夫に「子供を抱かせたりするのが厭」で、つい女房的な振る舞いをする自分に困惑する、という話がある。頭では分かつていても、永い社会慣例、そういう文化のなかで育つてきた者には、身体感覚が追いつかないということであろう。「自分の成長が、女房的なものにどうしても制肘され」てしまうと、そういう問題である。

『くれない』に書かれたこのエピソードを、私は密かに、佐多稲子のお茶くみの思想と名付けて尊重している。そして文学作品でも現実でも、身の回りのいろいろな局面でこのリトマス試験紙を応用して

みる癖がついてゐるが、要するに、古いことばで言えば思想と実生活という問題である。どんな立派な思想も、その人の日常生活、立ち居振る舞いにまで貫かれていなければ借り物にしか過ぎない。だから武芸者も信仰者も修行をするのだが、それは思想を身体、生活感情にまで行き渡らせるための訓練なのだ。

今度読み返した『くれない』には、「自分たちのように感情の生活を尊重しなければならぬ人間にとつて……」ということばがあつて、私はそうか、とも、なるほど、とも思つた。ここでの「自分たち」とは文学に関わる者という意味である。とすれば、これまで気付かなかつたが、「感情」は必ずしも『時に佇つ』だけの要語ではなかつたかもしれない。いま確認する時間のないまま直感で言つてしまえば、「感情」の語は佐多文学全体のキーワードなのだろう。言い換えれば、「感情」を鏡にし、物差しにして常に自身の思想を、生き方を確かめているのが、佐多文学の基本の姿勢なのだ。